

Rapport

2026
Number
134

Vol.134 Contents

多摩大学フットサル部 第22回全日本大学フットサル大会 準優勝	2
アジアダイナミズム研修	3
2026年度 第1回 SRC	4
【多摩大学の教員研究紹介】 ケニー・ジェスロ 専任講師	4
多摩大ジャーナル No.50	5
サークル紹介	6
高校生が広報記者に挑戦！多摩大学の「防災拠点」を取材	7
【学園祭のお知らせ】 多摩祭 /SGS Festa	7
〈後援会定期総会・セミナー〉 経営情報学部 / グローバルスタディーズ学部	8
令和7（2025）年度 学校法人田村学園概要	8



多摩大学フットサル部 堂々の準優勝！！ 最後まで諦めない熱戦で魅了



2026 年 8 月 27 日 (木) から 29 日 (土)、大阪府きんでんアリーナ (岸和田市総合体育館) にて「第 22 回全日本大学フットサル大会」が開催され、多摩大学フットサル部が圧倒的な強さと絆を見せつけ、見事全国準優勝に輝きました！

初戦から白熱した試合が続くなか、多摩大学は落ち着いたプレイで着実に勝利を重ねていきました。準々決勝の近畿大学戦では、見ごたえのある攻防を繰り広げて 4-2 で勝利！勢いそのままに臨んだ準決勝の東北大学戦でも、見事な連携で次々とゴールを奪い、6-2 で快勝して決勝の舞台へと駒を進めました。

【試合結果】は以下のとおり

【準々決勝】vs 近畿大学 合計 4-2 (前半 2-0 / 後半 2-2)

〔得点者〕柳田拓海 (No.14)、中村徠亜 (No.10)、
柳原理生 (No.70)、小林碧 (No.18)

【準決勝】vs 東北大学 合計 6-2 (前半 2-0 / 後半 4-2)

〔得点者〕オウンゴール、小林碧 (No.18)、
澤田新 (No.9)、奥田颯太 (No.8)、
柳田拓海 (No.14)、柳原理生 (No.70)

【決勝戦】vs 大阪成蹊大学 合計 1-5 (前半 0-2 / 後半 1-3)

〔得点者〕中村徠亜 (No.10)



準優勝おめでとう！賞状とメダルとともに全員で記念撮影



互いのプレーを称えあいチームを盛り上げる選手たち



決勝戦にて最後まで諦めず戦う選手たち

悲願の「日本一」をかけて挑んだ大阪成蹊大学との決勝戦は、互いに譲らない白熱したゲームとなりました。全力でピッチを走り抜けましたが、1-5 でタイムアップ。あと少しのところで悔しさが残る結果となりました。

しかし、全国の強豪たちが集う最高の舞台で、最後まで誇り高く戦い抜いた選手たちの勇姿は、見る者の心を強く揺さぶる素晴らしいものでした！現地会場や配信越しに熱い応援を送り続けてくださった保護者の皆様、関係者の皆様、そしてすべてのファンの皆様、熱狂的なご声援を本当にありがとうございました！

準優勝 選手インタビュー

「この悔しさを胸に、残るリーグ戦で優勝し、冬に再び全国へ」

経営情報学部 3 年 中村 徠亜 選手

大会を終えた直後の率直な胸の内を、チームの主力として躍進を支えた経営情報学部 3 年の中村 徠亜選手に伺いました。

——全日本大会準優勝、おめでとうございます！大会を終えて、今の率直な気持ちをお聞かせください。

中村選手：ありがとうございます。正直な話、終わった瞬間は「ああ、終わったな」という気持ちでした。今の率直な気持ちは、本当に「悔しかったな」という思いです。でも、この悔しさは忘れてはいけませんが、まだリーグ戦が残っているので、そこにしっかり気持ちを切り替えて、リーグ戦で優勝して冬にまた全国大会に出られるチャンスに向けて頑張りたいです。

——全国大会へ向けて、どのようなことに力を入れて取り組んできましたか？

中村選手：個人としては、シュートを打つことですね。監督からもずっと「シュートを打て」と言われてきて。東京都の決勝戦でも、関東大会の全国出場を決める試合でもゴールを決めることができたので、やり続けてきて本当によかったなと思います。全国大会の出場が決まった瞬間は、本当に嬉しかったです。

——フットサルを通じて自分自身が成長したと感じる部分はありますか？

中村選手：高校まではサッカーをやっていた、大学からフットサルを始めました。フットサルはサインプレーも多いし人との距離感も近いので、チームメイトと話す機会が増えましたね。自分の意見も言えるし、相手の意見も聞ける。そういうコミュニケーションの面で成長できたと感じています。

——最後に、高校生や後輩の皆さんへメッセージをお願いします！

中村選手：自分たちは来年インカレでまた全国に出て、日本一を取るの、一緒に戦えたらなと思っています。目の前の試合や目の前の相手としっかり戦える選手に、ぜひ入ってほしいです！



アリーナでの練習風景

今後とも多摩大学フットサル部へのあたたかく熱いご声援を、よろしくお願いいたします！

報告

2026年度 アジアダイナミズム研修（済州平和フォーラム参加）について

多摩大学は2026年6月23日から27日にかけて、今年で11回目となるアジアダイナミズム研修（済州平和フォーラム参加）を実施しました。本学両学部から52名（うち、教職員6名）、高大連携の一環として多摩大学目黒中学校・高等学校から9名（うち、教員2名）、多摩大学附属聖ヶ丘中学・高等学校から21名（うち、教員1名）、過去最大規模となる計82名が参加しました。

研修では、協定校の済州漢拏大学での対面による学生交流や、「第21回済州平和フォーラム」で国際機関のリーダーたちが繰り広げる最前線の議論に触れ、世界の課題を「自分事」として考える大きなきっかけとなりました。また、本学が企画した経営者セッションでは、創業オーナーの生の声を聴きながらリアルな経営理念を学び、その充実したディスカッションは国内外からも高く評価されました。

本研修は、グローバル人材育成の大きな第一歩となり、今後も学生が国際的視野と実践的な学びを深める機会を継続して提供していきます。



済州平和フォーラムでの集合写真

学生の体験記

済州研修で得た学び

経営情報学部 2年 河合 翼

済州研修では、現地での視察や学生交流、済州平和フォーラムへの参加を通して、多くの刺激を受けました。特に印象に残ったのは、異なる文化や価値観を持つ人々と直接交流できたことです。言葉や生活習慣の違いはありましたが、お互いに積極的に会話をすることで距離が縮まり、国境を越えて理解し合えることを実感しました。また、済州平和フォーラムでは、国際情勢や少子化問題について専門家の講演を聞き、世界で起きている問題を自分自身の課題として考える大切さを学びました。今回の研修で得た経験を大切に、今後は語学力や幅広い知識を身につけ、多様な価値観を受け入れられる人になりたいと感じました。



【多摩大学・100年経営研究機構セッション】での集合写真

自身の成長にも直結した5日間

経営情報学部 3年 加藤 隆之介

本研修で特に印象に残っている事は、「済州漢拏大学との交流（日韓学生交流会）」と「済州平和フォーラムへの参加」です。

1つ目の交流会では、私は多摩大学の代表として、ステージに立ち、「開会の挨拶」と「日本の年中行事の紹介」について発表しました。大勢の人の前で発表だったため、緊張のあまり言葉を詰まらせてしまう場面もありましたが、終了後に漢拏大学の学生だけでなく、多摩大学の学生からも大きな反響と評価をもらい、とても達成感を感じました。一方、漢拏大学の学生による「韓国の年中行事・文化の紹介」では、近くの国でありながら日本との違いがいくつもあって、とても興味深い内容でした。

2つ目のフォーラムの参加は、本研修一番の醍醐味であり、国際問題や経済をはじめとした世の中の動きについて、政治家・経営者による生の声を聴く事が出来ました。特に「地球温暖化」や「人口減少」の内容では、50年後、100年後を見据えた「シミュレーション」的データを多く用いていた事から、「我々は今何をすべきか？」が強く伝わって来て、今後の社会を生きる上でのヒントを得られる機会でもありました。さらに「日本訪問団懇親会」のセッションでは、鳩山由紀夫・元首相と握手をする貴重な経験も出来て、一生物になりました。

最後に本研修では、「リーダーシップ」の力をより高める事が出来ました。交流会で私がリーダーを務めた経験と、フォーラムで政治・経営の第一人者たちと対面した経験を活かして、将来的には「今後の社会を動かす原動力」となる存在を目指します。



済州漢拏大学交流会における記念品贈呈（加藤さん）

2026 年度 第 1 回 SRC (Student Research Conference)

2026 年 7 月 31 日、多摩キャンパスにて「2026 年度 第 1 回 SRC (Student Research Conference)」が開催されました。SRC は経営情報学部がホームゼミにおける研究成果を発表する場として年 2 回 (夏・冬) 実施されています。

今回の SRC では、前期の集大成として、学生たちはゼミ・授業で取り組んだ研究成果を口頭およびポスターで発表しました。研究テーマは観光、経済、SNS、AI、地域課題、消費行動など多岐にわたり、85 件の卒業研究や論文がありました。発表のあとは、質疑とディスカッションの時間が設けられ、教員や来場者とのディスカッションを通じて研究をさらに深めていきます。

質疑応答では、発表を聴講した学生からは、「研究内容が参考になった」「研究でたいへんだったことは?」「データの収集方法は?」など意見や質問が活発に寄せられました。また、教員からは「研究をさらに深めてほしい」「研究テーマが非常に面白い」といった助言や感想があり、研究を発展させるための貴重な学びの機会となりました。

本学では、今後も SRC を通じて学生の探究心を育み、地域社会や学術に貢献する研究活動を支援してまいります。

○学生の発表テーマや内容につきましては、右記の QR コードよりご確認いただけます。

URL : <https://studies-tama.jp/src/archive/src2026s.html>



多摩大学の教員研究紹介

教室から社会へ：注意力・問い・参加を育てる英語教育

グローバルスタディーズ学部 専任講師 Kenney Jethro (ケニー ジェスロ)

カリフォルニア州立大学チコ校で心理学の学士号を取得

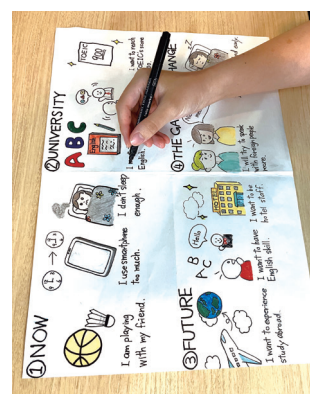
ニューヨークのニュースクール (The New School) で TESOL の修士号を取得



AI やスマートフォンの普及によって、私たちはかつてないほど多くの情報に囲まれています。一方で、学生が物事を注意深く観察し、自ら問いを立て、他者と協働しながら考える機会、必ずしも増えているとは言えません。私の現在の研究関心は、このような学習環境の変化の中で、学生がどのように「注意を向ける力」「問いを立てる力」「社会と関わる力」を育てていくかにあります。英語教育を単なる語彙や文法の習得としてではなく、学生が現代社会を観察し、自分の考えを言葉にし、他者と協働しながら行動につなげるための実践の場として捉えています。

授業では、少子高齢化、地域活性化、労働力不足、孤独・孤立、災害対応など、日本社会が直面する課題を扱いながら、ディスカッション、観察活動、発表、振り返りを組み合わせています。学生に対しては、正解を覚えることよりも、身近な現実に関心をもち、自分なりの問いを持ち、他者の声を聞きながら考えを深めることを重視しています。また、日々のスマートフォン利用や時間の使い方を可視化する活動を通して、注意力や主体性がどのように形成されるのかを考えます。自分の将来像や現在の行動を図や言葉で整理し、友人と共有する活動も、その一例です。

現在は、英語教育プログラムの再構築にも関わり、タスク型学習やアクティブ・ラーニングを基盤としたカリキュラム開発に取り組んでいます。近年は、注意力や深い学びを支える教育環境について研究しています。特に、デジタルツールとアナログツールの違い、AI が学習に与える影響、そして学生の主体性や協働がどのように育まれるのかに関心をもち、教室での実践と研究を往還させています。授業内での学生の発言、協働、気づきの過程を大切にしながら、理論が教室でどのように生きるのかを考えています。AI が急速に発展し、社会や働き方の前提が変化する時代だからこそ、大学教育には、知識の伝達だけでなく、学生が注意深く観察し、考え、社会に参加する力を育てる役割があると考えています。



目標を絵と英語で表現しながら共有



多様なテーマでのグローバル・ディスカッション

大学生活で磨かれた人間力

経営情報学部 4年 堀越 雪那

大学生活を振り返ると、人間力が磨かれた4年間だったと感じます。中でも特に印象に残っているのが、松本祐一ゼミでの活動です。松本ゼミでは、「奥多摩プロジェクト」の商品開発部と「聖蹟桜ヶ丘プロジェクト」に所属し、地域活性化を目的としたさまざまな活動に取り組みました。

「奥多摩町を若者が住みたくなる街へ」を活動目的に掲げ、町のPRや特産品開発に取り組む「奥多摩プロジェクト」において、私は商品開発部の事業部長を務めました。当初は「自分がやらなければ」という思いが強く、業務を一人で抱え込み、体調を崩してしまいました。そこで、先輩のマネジメント方法を参考にしたり、ビジネス書で学んだ内容を実践したりしながら、役割分担と情報共有を徹底しました。その結果、チーム全体の動きが円滑になり、私自身にも周囲を見渡す余裕が生まれました。この経験を通して、一人で頑張ることがリーダーシップではなく、周囲を信頼し、頼ることの大切さを学びました。



2026年度せいせき春のビールまつりに出店



堀越さんがデザイン制作したビールのラベル

一方、「聖蹟桜ヶ丘プロジェクト」では、京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンターにて開催される「ビールまつり」で販売するオリジナルビールの開発に携わり、ラベルデザインを担当したほか、「奥多摩プロジェクト」の一環としてわさび餃子の商品化を実現させました。さらに、多摩産材を活用した動物のパズル制作など、子ども向けコンテンツの企画にも取り組みました。

地域の方々や企業の担当者など、多くの社会人と関わる中で、企画提案や日程調整、連絡方法などに苦労しました。しかし、相手の立場を意識したコミュニケーションを心掛けることで、円滑に連携できるようになりました。多くの方と協力してイベントを成功させ、来場者の笑顔を見ることができた経験は、今でも忘れられません。

大学生活では、多くの挑戦と失敗を経験しました。しかし、その一つひとつと真剣に向き合い、仲間と支え合いながら乗り越えたことで、人を信頼する力、主体的に行動する力、そして最後までやり抜く力を身に付けることができました。これからも大学で培った人間力を大切に、新たな環境でも挑戦を続けていきたいと思っています。



堀越さんがデザイン制作した多摩産材を使った動物パズル(帝塚山大学の実践学生発表にて)

大学生活から学び、得て、次に繋げたいこと

グローバルスタディーズ学部 4年 堂下 晃大

私は多摩大学での4年間で様々な挑戦と経験を重ねてきました。それらは私にとって非常に絢爛たるものであり、どれも脳裏に焼き付いています。その中でも特に印象に残っているのは寺島実郎学長(以下、寺島学長)の「インターゼミ」の活動です。

私は4年間、「インターゼミ」に参加しました。ここでは専門性の異なる他学部の学部生や大学院生とともに論文の執筆やそれに伴う研究活動、それらの研究内容を発表するプレゼンテーションを行いました。その活動を通じ、様々な先生や学生、院生の方と交流をする中で自分の未熟さや伸び代に気づくことができました。

なかでも2年次に参加をしたサービス・エンターテインメント班の活動では、「Z世代によるタイパ重視Z世代に向けた旅のすすめ～短期間旅の学びと意識変化の検証～」をテーマに研究を行いました。フィールドワークでは北海道千歳市へ行き「短期間でも濃い体験と振り返りを行えば、長期旅行と同等の効用を得られる」という仮説のもと、農業体験やデジタルデトックスキャンプなどのフィールドワークを行いました。

研究を通じて得た一番の学びは、自己内省の重要性です。体験後に深い振り返りを行うことで、自分の立ち位置や理想と現実の距離感などを測ることができるようになりました。結果として論文執筆や発表などにとどまらず、大学での学びや人との関わりにもその学びを反映させることができ、研究を通じて提案をする側だった私自身が、最も旅の重要性に気づかされました。

寺島学長は、「インターゼミ」の中で「尊敬する人の偶像化」についてお話しされます。身の回りに心から尊敬できる人がいない人ほど生身の人間との交流が減っているというお話は、特に印象に残っています。私はそんな時代の中で寺島学長のおっしゃる「心の底から尊敬できる先輩」になれるようまずは在学中、そして卒業後も模範となる先輩でい続けられるように「挑戦」すること、「好奇心」を持ち続けることを大切にしていきたいです。そして将来的にはいただいた沢山の「恩」を返すだけでなく、次につなげる「恩送り」に努めます。



千歳での非日常を味わう農業体験



支笏湖でのカヌー体験から感じる変革的旅行経験

ボードゲームサークルF.E.I.T



サークル活動は、仲間との交流や息抜きの場であり、学業以外の成長を得られる機会となります。今回は、経営情報学部公認のボードゲームサークル「F.E.I.T (フェイト)」に注目し、日々の活動の様子や学びに繋がる意外な魅力について、代表の高野 友真さん（経営情報学部 3 年）にお話をうかがいました。



F.E.I.T (フェイト) 代表
高野 友真さん
(経営情報学部 3 年)

インタビュアーは
学長室事務課の熊切です



どのような活動をしていますか？

高野さん：F.E.I.T (フェイト) はボードゲームサークルです。サークルとして保有しているボードゲームの種類は 50 種類を超えています。その中から、毎週好きなゲームを複数選び、サークルメンバーで対戦しています。

サークルメンバーは何名ですか？

高野さん：1 年生が 4 名、2 年生が 2 名、3 年生が 3 名、4 年生が 5 名の計 14 名が、メンバーとして活動しています。

F.E.I.T に加入したきっかけは？

高野さん：授業や課題で忙しい大学生活の中で、息抜きができる場所が欲しいと思って、一番楽しめそうだなと感じた F.E.I.T を選びました。



予測不能！ダイスの結果に一喜一憂するメンバーたち

F.E.I.T に加入する前からボードゲームを楽しんでいましたか？

高野さん：はい。F.E.I.T に入る前からボードゲームやカードゲーム、ゲーム全般は好きでした。F.E.I.T に入る前にやっていたボードゲームもあるし、入ってから初めて知ってハマったボードゲームもあります。とにかく数もいっぱいあるので。

F.E.I.T はどんな人に向いていますか？

高野さん：ボードゲームは結局運が絡むゲームなので、勝ち負け関係なく楽しめる人だと思っています。

ゲームで勝つこと以外にも、楽しさや学びがあるのですね！

高野さん：そうですね。「勝てないとつまらないか」というと、実はそんなこともなくて。僕は基本的にゲーム中は黙ったり、他の作業をしないようにしています。ゲームに集中していないと、やっていることに対する反応とか返す言葉が、エンタメっぽくなくなっちゃうんです。

プレー中の会話そのものも楽しんでいるのですね！

高野さん：まさにそうです。人狼ゲームみたいな、交渉が必要なゲームとかは、ただやっているだけだとつまらないじゃないですか。そこに会話とか話し合いが挟まることで、ゲームがさらに面白くなるんですよね。だから、他の作業をしながらだと会話の流れが分からなくなるし、輪に入れなくなる。誰かが言ったことを拾って、それに対して面白く返したり盛り上げたりするのって、すごくセンスが問われるんですよ。

なるほど。その「会話術」や「交渉力」のセンスは、日常生活や就職活動にも生きそうですよね！

高野さん：相手から予想外の質問が飛んできても、それに対する答えを考えて出すという、適応能力がつかますね。「発想力」というよりは、「アドリブ力」になるのかな。これって、この先社会に出てもどんな場面でも使うスキルだと思うので、伸ばしておいて損はないのかなと思います。



白熱したゲームを繰り広げるサークルメンバーたち

最後に、F.E.I.T の魅力を教えてください！

高野さん：F.E.I.T は「来るもの拒まず、去る者追わず」、みんなバイトや授業で来なかったり、来ても授業の都合に合わせて抜けたりと、基本的には自由なところが魅力です。なんだかんだ言って、大学生生活は忙しいので、F.E.I.T を息抜きの場として使ってもらえたらいいなと思います。

仲間と楽しみ、視野を広げるサークル活動は、キャンパスライフの「息抜き」であり「学びの場」。本学はこれからも、学生たちの主体的な活動と成長をしっかりと応援してまいります。



取材にご協力いただいたF.E.I.Tの皆さん、ありがとうございました！

高校生が広報記者に挑戦！多摩大学の「防災拠点」取材しました！

～都立秋留台高校のインターンシップ生（2名）が、大学の魅力を伝える広報業務を体験～

本学ではキャリア教育支援の一環として、6月30日～7月2日にかけて東京都立秋留台高等学校の生徒2名を受け入れ、3日間のインターンシップを実施しました。

初日は「大学広報の役割や仕事を深く知る」ことを目的に、生徒たちが広報記者となり、本学の「防災拠点機能」取材しました。大学構内にあるさまざまな防災設備を巡り、それぞれの役割や災害時の活用方法を学びながら、「大学の魅力をいかに伝えるか」という視点でレポート作成に挑戦しました。ここからは、高校生記者が実際に学内を巡って見て・感じた「多摩大学の防災拠点」を見学した順番にご紹介します！

高校生記者が巡る！多摩大学の防災拠点レポート

つくる / 太陽光パネル



こんなにたくさんの太陽光パネルがあるんだ！

蓄える / 蓄電池



太陽光でつくった電気を蓄えて、災害時も活用できるんだ！

備える / 貯水槽



電気だけでなく、水も災害時に備えていることに気づいた！

活かす / EVバス



電気をつくる・蓄えるだけでなく、EVバスも災害時の非常用電源として活用できることに驚いた！

見える / 太陽光発電システム



実際の発電量が数値で見えて、電気の動きがわかる！



太陽光発電システム

備える / 防災倉庫



飲料水や避難用品など、いざという時に必要なものが揃っている！

高校生取材記



普通の大学だと思っていましたが、災害時に安心して避難できる場所だと分かりました。ものすごい数のソーラーパネルなど設備が充実していて驚いた反面、いくら設備がしっかりしていても「いざという時にどう動くか」が大事だと痛感しました。今後は防災意識をより高めていきたいです。



取材レポートを作成中



一番印象に残ったのは852枚もある太陽光パネルです。非常時にはEVバスと連携して、たくさんのスマホを充電できることに驚き、地域を守る備えの凄さを感じました。私も多摩市民なので、地元にあるこの心強い防災拠点の存在を、まだ知らない多くの人に伝えていきたいです。

多摩大学より

【地域と共にある防災拠点として】

今回の取材を通して、高校生たちが設備の持つ役割だけでなく「いざという時の行動や意識」の大切さに気づいてくれたことを大変嬉しく思います。本学はこれからも、地域の安全を守る「防災拠点」としての機能を磨くとともに、若い世代や地域住民の皆様と共に、日頃からの防災意識を高める活動を続けてまいります。



学園祭のお知らせ

多摩キャンパス

経営情報学部

第38回 多摩祭

2026年 10/24[±]



湘南キャンパス

グローバルスタディーズ学部

第20回 碧翔祭 SGS Festa 2026

2026年 11/7[±]

経営情報学部

2026年6月28日(日)多摩キャンパスにて「経営情報学部 後援会定期総会・教育セミナー」が開催されました。定期総会では、2025年度事業報告・決算報告、2026年度事業計画・予算、2026年度後援会役員選任が承認されました。教育セミナー第1部は、齋藤S.裕美教務委員長による「カリキュラムの説明」、平石隆司国際交流委員の留学制度紹介、卒業生が自らの留学体験を発表した「卒業生が語る。多摩大学のプログラム」があり、第2部のゼミ別相談会は、保証人様と教職員が学生の大学生活や学習について懇談する有意義な時間となりました。



定期総会の様子



小林英夫学部長の挨拶



ゼミ別相談会

グローバルスタディーズ学部

2026年6月6日(土)、湘南キャンパスにて「グローバルスタディーズ学部 後援会定期総会」が開催されました。定期総会では、2025年度事業報告・決算報告、2026年度事業計画・予算、2026年度後援会役員選任が承認されました。その後、新美潤学部長がグローバルスタディーズ学部の教育方針である「3つの専門課程、SGSを貫く横串、改革の方向性」を解説、今村康子准教授の講演「旅が人を変える?ー変革的旅行体験と非認知能力の育ち方」が行われました。個別相談では、履修・成績、学生生活、留学、就職について、各会場で保証人様と教職員が面談しました。



定期総会の様子



新美潤学部長の説明



個別相談会

■ 令和7(2025)年度 学校法人田村学園概要

多摩大学の経営母体である学校法人田村学園は、私立学校として積極的に情報開示をしております。最新の田村学園概要は、以下のとおりです。

(学校法人 田村学園 貸借対照表)

貸借対照表

令和8年3月31日(令和7年度)

(単位:百万円)

資産の部			
科目	前年度末	本年度末	増減
固定資産	25,166	25,140	△26
有形固定資産	20,099	19,934	△165
土地	12,996	12,996	0
建物	5,746	5,499	△247
その他	1,357	1,439	82
特定資産	2,692	2,792	100
第2号基本金引当特定資産	2,600	2,700	100
第3号基本金引当特定資産	92	92	0
その他の固定資産	2,375	2,414	39
電話加入権	5	5	0
その他	2,370	2,409	39
流動資産	5,742	6,228	486
現金預金	5,380	5,876	496
その他	362	352	△10
資産の部合計	30,908	31,368	460
負債の部			
科目	前年度末	本年度末	増減
固定負債	540	554	14
長期借入金	1	1	0
退職給付引当金	534	549	15
その他	5	4	△1
流動負債	1,149	1,412	263
短期借入金	1	1	0
前受金	635	633	△2
その他	513	778	265
負債の部合計	1,689	1,966	277
純資産の部			
科目	前年度末	本年度末	増減
基本金	35,378	35,602	224
第1号基本金	32,334	32,458	124
第2号基本金	2,600	2,700	100
第3号基本金	92	92	0
第4号基本金	352	352	0
繰越収支差額	△6,159	△6,200	△41
翌年度繰越収支差額	△6,159	△6,200	△41
純資産の部合計	29,219	29,402	183
負債及び純資産の部合計	30,908	31,368	460

(令和7年度 学校法人 田村学園 計算書類 抜粋)

(資金収支)

(単位:百万円)

学生生徒等納付金収入		3,526
手数料収入	87	
寄付金収入	94	
補助金収入	1,826	
資産売却収入	0	
付随事業・収益事業収入	164	
受取利息・配当金収入	84	
雑収入	197	
その他	19	
前年度繰越支払資金	5,380	
合計	11,377	

(資金支出)

人件費支出	3,268
教育研究経費支出	1,317
管理経費支出	541
借入金等返済支出	1
施設関係支出	107
設備関係支出	225
その他	42
翌年度繰越支払資金	5,876
合計	11,377

(令和8年度)

・学生・生徒等(人)	田村学園全体	4,418
	多摩大学 学部	
	経営情報学部	1,376
	グローバルスタディーズ学部	589
	多摩大学 大学院	127
	高校(2)・中学(2)・幼稚園(3)	2,326

・キャンパス面積(m ²)	田村学園全体	115,932
	多摩大学	44,913
	その他	71,019

以上、令和8年5月1日 現在